

第6回 佐倉市におけるこれからの学校のあり方懇話会

日時	令和7年8月6日（水）午後13時30分から午後15時30分まで
場所	議会棟 2階 第3委員会室
出席者	<p>○出席委員 古賀 毅委員、定野 司委員、辻 太久郎委員、宮本 正教委員、石田 加奈子委員、岡島 由夏委員 以上6名</p> <p>○事務局 緑川教育部長、宮崎教育総務課長、松丸学務課長、山本指導課長、舎人社会教育課長、塚越教育センター所長、藤崎室長、新川副主幹、伊藤主査、大野主査補</p> <p>○傍聴人 4人</p>
配付資料	<ul style="list-style-type: none"> ・次第 ・資料1 （仮称）佐倉市におけるこれからの学校のあり方に係る基本方針（素案） ・資料2 基本方針（素案） 第5章関係
議事	① （仮称）佐倉市におけるこれからの学校のあり方に係る基本方針（素案）について
<p>1 開会</p> <p>2 議事</p> <p>【議長】 それでは次第に沿って進行してまいります。</p> <p>いよいよ基本方針を取りまとめる段階になりまして、これから中身を具体的に作り上げていくような協議になります。細かなところは色々あるのですが、中長期的な市の教育施策の大事なプランを成すものでありまして、これに基づいていろいろなものが決まっていきます。従って、細かいところはもちろんなのですが、大きな方向というかですね、その辺をこれからは是非共有して進んで参りたいと思います。</p> <p>今日はですね、もうそういう段階に入っておりますので、この原案の原案、のようなどころをご披露いただきながら、我々の方でコメントとかですね、意見を加えていきたいと思っております。今言ったように具体的なプラン作りの段階に入っておりますので、質問は質問で結構ですが、こういうところをぜひ盛り込みたいというようなそういう具体的なお話をぜひお聞きしたいと思いますので、事務局のご報告が終わった後に、委員の皆様全員お1人ずつお伺いいたします。</p>	
<p>～議事① （仮称）佐倉市におけるこれからの学校のあり方に係る基本方針（素案）について～</p> <p>【事務局】 （資料1・2に基づいて説明）</p>	

【議長】

大変丁寧に作っていただいてありがとうございます。

デザインの的にもかなり見やすくなりました。不登校のところをグラデーションにしてくださいと言ったのですが、このようなことを望んでいたのが非常によいと思います。グラデーションや多様性というのは案外意識されないのです。どうしてもありか、なしか、ということになってしまっています。

今の話の中心にありました、多様なニーズへの教育の取組というのが、現在審議中の学習指導要領でも、かなり強めに出てくると思われています。それをどうするかというところが重要になってきます。それも含めてですが、今までの学校教育をかなりモデルチェンジしないと対応できないところが相当出てきます。今、お示しいただいた中にも、地域社会、児童生徒本人、保護者とかいろいろなステークホルダーからの立場ということがあるので、それらの方々に強制力を働かすことはできません。基本的には、行政と学校現場、教職員が取り組むしかないということになりますので、その質をどうしていくのかということだろうとは思っています。

私から、前回の会議後に出てきたトピックで、これに絡んでくるようなことをいくつか申し上げます。

全国学力・学習状況調査の話が先ほどありましたが、最新版の速報が出ました。概ねまあまあなのですが、文部科学省の経年変化分析調査によりますとこのところ学力が落ちているということが明らかで、コロナを挟んでいろいろな情勢が変わってきており、スマートフォン依存との相関性ということが言われています。つまり、スマートフォンが人間を馬鹿にするというよりも、そんなことに関わりすぎて勉強する時間が明らかに減っている、読書量が減っている、あるいは、対他コミュニケーションが減っているということだろうと思えます。

学習指導要領についても、そろそろ取りまとめの段階だろうと思われまので、いろいろなリークやアドバルーンが出てきました。「弾力化」ということが、キーワードで出てきています。先ほど、2階建ての図で示されたとおりに、いろいろなニーズに対応して、カリキュラムを柔軟に現場裁量で運用していきましょう、ここまでは認めます、ということがかなり出てきます。相場をみて、近隣校はどうなのだろう、隣の市はどうなのだろうとなりがちですが、これは逆に、許されている範囲ストレスでやる。あるいは、ストレスを超えても怒られるのを承知でやる。何よりも、児童生徒の支援と成長が大事だという視点に立てば、そのようなことになると思えます。

小中学校に関して、今回、大きなトピックで言われているのが、戦後ずっと維持されてきた、技術・家庭のおそらく解体に近い再構成が行われるとみられています。免許外教員で技術が圧倒的に多いということは、構造的な問題です。家庭科は、高校にもあるのですが、技術は中学校だけの教科です。しかも、工業大学でも、我々、千葉工業大は技術の教員を出していません。出せるところと、出せないところがあります。近隣ですと、千葉大くらいですかね。工学院、日工大であれば取れますが、技術だけ出せるというところは、ほぼないという情勢です。今回、情報、ICTに特化した形で技術を再編するという動きが出てきました。おそらく、免許上の在り方も変わってくるだろうと思われま。これは、前から申し上げている

様に、児童生徒というよりも、社会人の ICT スキルが低すぎる。これだけ ICT 漬けになっているのに、皆遊んでばかりで学習や生産に使っていないということの反映です。その焦りが、経済界にあるということだろうと思います。おそらく、事実なので、今、高校でやっているような情報の授業を中学校に下ろしてくるようなイメージだろうと予想されています。そのようになってきて、教科の枠組みが判明した段階で、私たちも教員の育成に着手しようと考えています。例えば、国語でも保健体育でも ICT のできない先生はこれからいらないので、技術の先生だけができるということではなく、全員、ハサミとか糊のレベルで使える。そうでないと、先ほど示していただいたような、新しい学校教育の姿に対応できないと思います。

特別支援教育の話があります。多様なニーズという話の中に、当然、これらも含まれてきます。少々ややこしいのが、特別支援学校は県の所管です。特別支援学校は、学校の生徒だけではなく、地域における特別支援教育のセンターとしての機能を有するので、市町村立小中学校との連携ということが出てきます。例えば、従来からあるのですが、週に1回特別支援学校に通うようなことも今後ますます出てくるだろうと思われれます。今回、大きな変化として見られるのが、特別支援学級を高等学校にも設置する流れになってきました。大学はやっているのですが、高等学校が特別支援教育の一番だめなところであります。学力でフィルターされるからというところもありますが、小中学校でせつかくやってきて、高校で行き場がないという情勢になっていましたが、特別支援学級を高等学校に作るということになります。ということは、中学校の送り出し側での、先を見通した教育ができる。今までは、この先どうするか、ということが中学校での一番の悩みの種だったと思いますが、そこに、少し光が差してきたかなと思います。

もう一つ、別枠ですが、私どもの仕事である教員養成・採用というところで、国は、教員不足だからといって、教員を増やすつもりはないと改めて明言しています。先ほどの、義務教育学校、小中一貫教育、あるいはかねてから申しているような中学校ならば中学校という同一学校種内での教員のやり繰り、そういう意味での弾力化が不可避であろうと思います。これも、何先生は第一中学校の所属というような今までの発想でやっている間に合わないので、頭を柔軟にしていかなければならないのかなと考えています。

ここ1、2か月の話としてはそのようなことがありました。

それでは、今報告いただいたことを基に、委員の皆様からご意見、ご発言をいただきたいと思います。

【委員】

小中一貫教育に向かっている中で、自分の中で、課題のようなものの、絶対こうなりそうだと思って書いてくださっている課題というところに光が差せば、そっちのほうに全体的に向かっているのかなと思っています。

一体型における9年間の一貫教育は、児童生徒の人間関係の固定化というところで、確かに、人の出会いで人生が変わっていくと思うと、会う人が少なくなると確かに固定化されるかと思っていたのですけれども、いろいろなことがあるかとは思いますが、毎年シャッフルといえますか、クラス替えをする。リセットというか、

今までの人間関係を、修学旅行などで、好きな人とグループを作ってやるみたいなのを、全然違うグループでもこちらで作り変えて、会ったことのない人と関わって何かを進めるというところに、子どもたちの自主性に任せてという言葉で、意外に注目されないのかなと思っています。中学校の修学旅行では、3クラスあって1組の子と3組の子はなかなか会う機会がなかったりするのですが、男子はシャッフルなのに、女子は先生たちの気遣いなのかわかりませんが、好きな人で固まったりしていて、なんでそんなことをするのだろうと客観的に思っています。いろんな人と出会うということ、意外に、教育現場でそのような機会を与えているのは少ないのかなと思いました。そこは、教育の中でも意識的に、いろいろな人と接することができるような環境にしてもらえたら良いなと思います。

転出入の児童生徒の学習内容の違いということは、確かに学校によって進み方が違うのですが、先生の人数が足りないという中で難しいとは思いますが、1週間だけ転出してくる子どもがいます。2日だけでも入りたい子がいるという状況だというのを聞いて、子どもたちは対応できると思います、先生方に負担がかかっているのかと思います。それをケアできる役割の人がいたら、ここはクリアになるのかなと思います。

小学校高学年のリーダーシップ、自主性を育成する機会の減少について、5、6年生で目を輝かせている子どもたちを今まで見てきていると、確かにそうだと思いますが、逆に、このような課題があると見えているので、子どもたちから生み出されるプロジェクト、ワクワクするプロジェクトを子どもたちから作るような提案をする。手を挙げてやるというよりは、リーダーシップを全員が取れるように順番制にするというようなことを入れていただくとか、全員が1回はリーダーをやってみるという体験を高学年でやるのがあったらいいと思います。

疑問に思っていたのですが、指導計画ですが、小中一貫になったときに、数学を教えていた中学校の先生は、中学校の1年だけでよかったものが、2年も教えなければならないということもあるわけですね。小学校の算数も教えなければならないということもありますか？

【議長】

中学校の教員は、大体学年配置ですが、時によると1、2、3年全部教えるということがあります。その要件を満たしていないと教員になれないのですが、小中一貫になった時に、小学校高学年くらいの算数も教えるようになるとか、逆に、小学校の教員が中学校の何らかの指導に入るといった可能性があります。今までないのはそのはみ出しの部分です。

【委員】

そうですね。そうであれば、かなりの負担、時間がとられたりするのかなと思います。反面、これまで数学の横の繋がりのようなものがなかったとしたら、新しい横の繋がりのようなもので、情報交換ができる場所ができれば、それをうまく活用できる場面があるのかなと思います。

大阪の友達の通うところが、小中一貫にもうすぐなると聞きました。建物は別々でやるけれど、先生は行ったり来たりすると言っていました。保護者側からすると、どちらでも良いという感覚です。心配したのは、先生たちに負担がかかるということ。自分のキャパシティ的にそれが可能なのかな？と思います。中学校で今までやっていて、簡単なものは教えられるとは思いますが、カリキュラムは複雑だと思しますので、中学校の受験生に向けたことをやっている先生が、小学校高学年のことを教えなければならないということは、時間的な負担がかかってくるのかなと思ったときに、横の繋がり、数学会のようなものが、市の中であると良いのかなと思います。

【議長】

ありがとうございます。主に小中一貫の話ですが、この続きで発言される方がいらっしゃるでしょうか。

【委員】

教育現場に身を置きながら、来年4月から小中一貫校ですよと言われたときに、自分がどういう立場、どんな役割を担うかということ想像できない状況です。教育現場に携わる人間も意識を変えていかなければならない時代に来ているのかなという思いを持ちながら聞いていました。

9年間の指導ということであれば、ギャップの部分、繋ぎはうまくいくのかなという感覚は持っています。

小学校の実情をお話しすると、教育の質の向上という意味よりも、1年間どうやって教育の一定の質を保つか、ということに苦勞する昨今です。学級担任が、ほぼ1日、ひとつのクラスの子どもたちに接していくという、小学校の現在の枠組みの限界を正直感じています。毎年苦勞しています。あそこのクラスをどうやって一年間持たせようかという部分で。

そこで、いろんな職員が入れ替わり立ち替わり指導に携わるということで、授業の教科の指導、生徒指導ということが一定のレベルに保つことができる。そのことはわかってはいるのですが、隣のクラスと教科によつての授業量、もちろん教科によつてコマ数が、教科担任したくても、入れ替えたくても、持ち時数が変わってきてしまう。ということで、なかなか教科担任ということも、小学校の時数でいうと難しいところがあります。ですので、まずは子どもたちを授業で引きつけるというところが、子どもたちの安定を図るという意味では一番大事なところかと思えます。中学校の先生の専門的な指導力を、小学校で活かしていただけるのであれば、すごく効果があるのではないかなと思っています。

反面、私たち小学校の教員が、中学生に対して何ができるかと問われたときに、何ができるかなと自分でも答えが見つからないところがあります。ぜひ、小学校の教員に求めるような、私たちが貢献できるようなところは何かというところを教えてください。将来に活かせるのかなと思います。

【委員】

自分は2年前まで小学校にいましたので、ある程度比較はできます。小学校の先生の指導は、細かいじゃないですか。自分のクラスのこども1人を毎日、丸々1日、1年間見るから、その子に応じた、学年の発達段階に応じた指導はすごいと思っています。手品を見るようなすごさを感じます。そこは中学校の先生たちにも学んで欲しいと思っています。

ただ、小学校の先生が、そのまま何かの授業を中学校で教えるとなると、違うかな、難しいのかなとは思いますが。

小中一貫ということでは具体的に何をやるのだろうか。小中一貫にすることによって、メリットは何かということ、現場の先生たちは多分ぼやっとしているのではないかと思います。このようなメリットがあるということをはっきりできれば、それではやろうという機運といいますか、勢いも増すのでしょうが、今のところ、小中一貫することによって失われるものの方が、現場としてははっきり見えています。もちろん、それに引き変わるものもあるんですけど。その辺、現場でもう一步踏み出せない理由があると思います。

後は、おっしゃってくださったように、現場は疲弊しています。明日、この人ぶっ倒れないかな、明後日、この人来てくれるかなという状況です、大げさではなく。その中で、また新しいこととなると、そこでもやはり、教員側が二の足を踏んでしまうところがあるのかなと思います。

小中一貫にすることによって、こどもたちに教育的効果があり、教員も嬉々として仕事に取り組めるウルトラCを佐倉市で生み出してくれると、全国の手本になるのかなと思います。

千葉県の上の方の市では土曜日に未だに授業をやっているらしいのです。その市が、学力的に、全国的に高いかどうかということはあまり聞いたことがないです。先生たちは疲弊しているのではないかと思います。だから、やれば良いということではなく、働き方も含めた効果が出てこない、やはり、前のほうが良かったでしょうとなるのではないかと思います。

【議長】

ありがとうございます。先ほどの教科については、後ほど話したいと思います。

【委員】

小中一貫は、足立区では二つの学校で手をつけていますが、まだそんなに大きな効果はありません。それには、施設の問題などもあります。それは一緒に考えなければならぬのかと思います。環境と、先生方。この話は、こどもたちの発達段階が、6、3で良いのかということから始まっているので、それを5、4とか、4、5とかができるのではないかと、小中一貫の最初のポイントだったと思います。それをまずははっきりさせて、何のためにやるのかということかと思えます。

今回は特に、小学校の単学級の解消が入っていて、さらに、施設の更新があり、その上で、小中一貫という流れがあると思います。とても良いことだと思いますの

で、整理した上で、意味があるのかどうかという議論をした方が良いと思います。そうでないと、端的に言うと、小中一貫にしたのであれば、今までよりも学校が遠くなる。これまでは30分だったけれど、40分、50分かかるのではないかという話だって具体的にありわけですよね。それから、小学校の先生どうするのというわけですから、そのようなところを丁寧に議論しておかないと、横から、いろんなことが指摘されてしまうということがあります。

私自身、小学校の先生というのは、学級担任は良い制度だと思っていました。なぜかといいますと、全教科をやらなければならない。先生は苦しいわけです。苦しんでいるところを子どもたちが見て、先生だって苦しんだり悩んだりしている。要するに、成長している。そういう先生の姿を見て、僕らだってできるのではないかなと私自身はそう思っていました。ただ、今の全体の状況を考えると、低学年はできるかもしれないけれど、中、高学年になると、やはり難しいなと思っています。

【委員】

自分は、まちづくりとかイベントを主催するという視点で見ると、これを実践するときの組み立てはどうするのかというところに目がいきます。それで、これは一気に、理想の形にはやれないでしょうし、一つずつやるということも、時間がかかると思います。この中で、共通する大切なことが見えてきたら良いのかなと、ぼんやり考えながら、今日は来ました。皆さんの話を聞いて、そこを一段深掘りしようと思っています。その上で、この中で自分に一番響いた、大事だと思っているところは、最初から言ってきた通り、心が整っていることが、何より大事だということとは変わっていません。これは、先生の心もそうだし、生徒の心もそうだと思います。それがなかったら、「ひとと、知と、社会と」が繋がるということも叶わないのではないかと思います。今聞いていても、先生の負担が大きく、今後、先生が増えることもないでしょう。どんどん負担が増え、いろいろな問題が起きて小学校と中学校が一緒になるということも、今後は出てくるだろうという時に、やはり、地域との連携は絶対的に必要なのではないかと思います。資料2のp.20の、学校運営協議会という、地域との連携をとって、細かくケアをしあえる関係というようなものが軸にあり、その上でこの中でやれることを作りながら、連動してやっていけたら良いのかなと思っています。

【委員】

資料1のp.32についてですが、まさに今おっしゃっていたとおり、問題解決の方法として、子どもと教職員の教育環境、職場環境が書いてありますが、保護者や地域がここに入らないといけないのではないかと思います。そうすると、それではどうするのかということが出てくるので、右側の基本方針のところ、プロジェクト01、02、03は教育環境で、かぶっているところがあるとは思いますが、04が働き方、05の今の話だったところは絵に出てこないですね。保護者というのを入れてあげると、教育の問題は学校だけで解決するものではないということにしておかないと、負担が重すぎて、ギブアップですよ。そうではないというところ、保護者の責任もあるのですよというところを、しっかりしておかないといけないので

はないかと思えます。全部学校に任されてしまっているというのは、負担が重すぎですよね、と思えます。

【議長】

ありがとうございます。

教育の主体が、学校や先生だけではなく、地域でもあり、保護者でもありという、本当は分有されているのですよね。長いこと、地域社会とか家庭・家族が崩壊というようなことになり、学校が全部を引き受けるようにしわ寄せが来ているというような議論だったのですが、私はそうではないのではないかと思っております、二つ、もしくは同じものかもしれません。

一つは市場、マーケットというのがあり、それが相当、こどもの成長、言ってみれば、教育のようなことに作用しています。例えば、学校の先生の言うことは聞かない、親の言うことは聞かないけれど、流行の言うことは聞くとかです。資本家の宣伝の言うことは聞くというような、ブームに乗らなければというようなところがあります。おそらく、これと同質だとは思いますが、最近の ICT、SNS も含めた情報環境、特に、AI が発達して以来、AI に宿題を全部やらせる。答えをグーグルに聞いているときは、まだ、どこのサイトで調べるということがありましたが、それを飛ばして、答えだけを聞くということが、小、中、高、大学も全部、ここ 1、2 年で急にそうになりました。例えば、教材を配るとそれをスキャンして、全部 ChatGPT に放り込み、これを 1,000 字くらいに要約してください、小学生にもわかるように翻訳してくださいというと、出ます。無料版でも出ます。それくらいのことをして良い点は取れます。そうなってくると、本当に自分が知りたいこととか、やりたいことはどうするのかということ、絶対に、学校ではなく、市場の言うことを聞くという感じになってきています。大分そこがわかりやすくなってきているような気がします。

先程お話の中にあつた、数学の横の繋がりということですが、これは従来からやっています。むしろ、数学、算数、国語それぞれの教え方をどうするかということですが、閉じているのです。

最近では忙しくてそれどころではないということもありますが、性質の違いがあり、小学校の先生は、先ほどお話にもありましたが、発達の専門家という色が強いのです。こどもの専門家です。小児科のお医者さんと同じように、こどもとその成長、発達を専門的に見つめてサポートする、ケアする、集団のこどもたちをまとめていくという技に長けています。

これに対して、中学校の先生は、教科の専門家というのが、免許上も明らかです。国語、数学、保健体育それぞれの専門家というところがあります。どちらが良いということではなく、それぞれ、得意、不得意があります。でも、算数と数学は同じものです。小学校の国語と中学校の国語、高等学校の国語は同じものです。ここは是非分かって欲しいのですが、小学校の算数は易しくて教えやすいのではないのです、一番難しいのです。つまり、同じものを小学校の低学年児童にわかるように教えなければならないので、大人がやっている算数と同じものを教えなければならないので、これが一番大変なのです。そこが、中学校で問題になってきていて、

どの教科も、ついていけない生徒の割合が高くなっています。そうすると、小学校的な教え方を中学校で求められていますし、大学の先生にまで求められています。世が世なら大学生になっていない層がいっぱい来ていて、なんでこんなことを勉強しなければならないのですかということから始まり、これはどうすれば良いのですか、わかりやすく図にして説明してください、TikTokで教えてくださいというような学生を相手に教えなければならないわけです。小学校的な発達段階に即したことをやらなければならないのです。

先ほどの小中一貫の話で、4ページで、委員がおしゃっていた、いろんな背景が同時に進行して、こうなっている。もう一つ言うと、恐らく、校長先生の数が減ります。合理化が進みます。教員がこれ以上増えない中で、やり繰りするというのがあると思います。さらに、5、4にする。4、5にするような可能性もおっしゃっていましたが、6、3である必然性はどこにもないのです。この枠は、恐らく、日本では変わらないだろうと思います。品川区がどうしているかと言いますと、6、3を一つのまとまり9として見て、4、3、2という傾斜をつけて運用するというのをしてみたわけです。何かというと、第二次性徴が起こる時期から、3年くらいをかけて、体の発達成長のことはよく言われるのですが、ものの考え方や価値観、人間関係が劇的に変わってきます。言うところの、青年期という段階に入ってきます。それが、急激に起こると、こどもによって、起こる早さとタイミングが違うので、小学校高学年から、中学2年生くらいまでごちゃごちゃになってきています。

一例を挙げますと、英語は5年生から教科に入っています。文法は難しいじゃないですか。国語であれば、文法がなくてもしゃべれますが、英語は外にあるものだから、文法を介さないと理解できません。どうして3人称の時だけsが付くのか、訳のわからないことをやらなければならない。疑問文にしても、doはどこから出てきたのかということをやらなければならない。それをやることによって、個別の場面ではなく、あらゆる場面で使える英語になっていくわけです。抽象化しないとイケないわけです。抽象的に考える能力というのが、発達段階の青年期に出てくるというわけです。

もう一つの例でいいますと、3.14で良かったものが、 π になる。絶対3.14の方が近似値として使いやすい数字です。 π にしないと、数学にならない訳です。もっと高度な工学では絶対に π なのです。情報もそうです。それは、小学校3年生のこどもにはわからないのです。抽象化できないのです。具体的な算数セットにでも置き換えないと、理解できません。それが、なんか知らないけれど、突然、体の変化に伴って抽象的に物事を考えられるようになる。それで、人間関係も作り直されて、リーダーシップの話もありましたが、お友達と価値観で近づいたり、趣味で近づいたり、自分の進路を想定したり、あるいは、愛とか平和とか自由とか抽象的なことも考えられるようになるという、ものすごく大事な時期なのです。それが、栄養状態が良くなっていることにより、戦後すぐは6、3で良かったのが、今は恐らく、5年生でその境目が来るので、小学校高学年から中1くらいまでがその移行期間です。急に、抽象化が始まるので、そこに対応しなければならないというところがあります。それなのに、現実には、中学になって、急に教科の先生が入ってきて、それぞれの専門をやり始める。その段差が激しい。そのような問題があります。

ということですが、6、3が変わることはないので、その中で我々は運用していかなければならないということですね。恐らく、小学校でも、高学年の児童は、別物になってきていますから、扱いは難しいでしょう。昔と違い、中学校で終わりという生徒はほとんどいませんので、高、大とその先がありますので、こどものままというかそのようなタイプのお子さんが増えてきているだろうと思います。それぞれ、やりにくい部分があり、以外と共通しているということがあるかもしれないです。

【委員】

9年間という括りで物事を考えるというのは、私もとても賛成です。6年間でやらなければならないことというのは、小学校の先生は、一生懸命考えてくださっている。3年間で、中学校の先生はそれを引き継いでやる。そのような、現在の学校のあり方を9年間のスパンで見たら、実は、保護者や地域のようにこどもも、実は、教育をできるかもしれない才能を持っているのかもしれないです。9年の間であれば、どんな失敗しても許されるという土壌のようなものを培うことができたなら、高校や大学に行っても、とても豊かな人生を送れるのではないかと思います。

例えば、中学校1、2年生の子からすると、小学校2、3年の授業で教えることができるのかもしれないです。こどもたちが低学年を教えるとか、9年の間に、同じ学校内でそのようなことができるというような、新しい学校の作り方のようなものがあれば。ちっちゃい子は、こういうお兄ちゃんたちがいるというのを見て、高学年になったら、このようなこともできるとか、想像が膨らみやすいかなと思います。

失敗しても許されるというような、先生たちもそれに対して、ある程度おおらかに見ていただく。こどもたちは、9年間であれば色々とチャレンジできるのかなと思います。

いまのこどもたちは、感覚と映像といいますか、直感と映像で学んでいることがとても多いと思います。大人であれば、説明書を見なければならないようなことを、こどもたちは感覚で、とてつもない能力でどんどんできる時代だと思います。こどもの社会の授業で、パワーポイントを使い発表するというのを見ました。無料動画でイラストを作り、こんなのは誰でもできるよという感じでした。今、中学生がそれをやれたら、2、3年後には小学校高学年でもやれるという時代になって来ていると思います。私たちは追いついていないと感じます。

こどもが役割を持って何かをするということは、9年間であればトライできるのかと、ワクワクする学校のあり方が作れそうだと思います。こんなにこどもたちの人数が減り、校舎に対してこどもの人数が少なくなる学校が絶対増えてきます。佐倉市では、不登校のこどもが増えているという現状で、そういう学校を一つ作るというのも良いのかなと思います。実験校のようなものを作るということは、希望になるのではないかと思います。

【議長】

ありがとうございます。

他者といいますか、いろんな人との出会いの機会というところがとても重要で、地域の話とも結びつくでしょうし、SNS で決まった相手と閉じた環境でやり取りするばかりだと、それは歪むだろうというのは簡単にわかります。出会いの場、他者と協働する機会の場が、イベントではなく、日頃の学校界限に取り込めるかどうかということだと思います。

どうでしょうか。現状を踏まえて、こんなことも可能性としてあるとか。

【委員】

他者との関わりというところでは、校舎はこれから空いてくるから、そこに、地域のものを入れたら良いのではないかと思っています。私立の公民館をやりたい人は結構いるので、そういうものを校舎に入れて、地域の人が入りし、学校のこどもたちとも連携できるような仕組みを作るということも良いかと思っています。良い状態というのは、急にそこには行かなくて、グチャグチャと、良いことも悪いこともあると思います。失敗もあるでしょう。試していける土台を、佐倉市でしっかり作ってくれているところもセットで、大事なのかと思っています。外へ学校を開き、地域の人に関われる仕組みを作っていくということも、セットで考えたいと思います。校舎に別のものを入れるということも、普段、考えています。

【議長】

先ほど、いろいろな人と出会って、半ば強引にでも関わりをつけて経験させるという話がありました。

従来、学校教育はそのような建付けだったと思うのですが、人数が多いときは特に。段々少子化になっていること、ナイーブといいますか、あまり心の強くないお子さんが増えてきていて、そのような負荷にはとても耐えられない。他者との出会いがストレスだということも一方でありますよね。そのあたり、いかがでしょうか。

【委員】

全員がそうだということではないのですが、うちのこどもたちは、何かあると、寛容性があります。「そうだよね」と受容する。しかし人に働きかけるのは苦手だと、いう子は多いです。例えば、違うグループがあり、積極的に何かを働きかけようとするのは難しいかもしれません。逆に、働きかけてくれると、それを消化する能力はあると思います。

うちでも、専門学校を抱えているので、月に一度はソーシャルスキルトレーニングで、その先生が来ます。専門学校の先生だから、授業っぽくて、それはそれで良いのです。生徒はついて行きます。生徒はまだ発達段階です。なぜその仕事選んだのか。専門学校に通っているのか、何に苦労しているのかという話が、こどもたちに一番伝わります。そうすると、話を聞きます。自分たちが今度は何をやるかということを考える。そのような繋がりになるのをよく見て取れます。

だとすると、委員がおっしゃっているように、そこに入るのが良いかわかりませんが、そういう人たちがいて、関わりを上手に持つことができれば、プラス

になると思います。今、そういった関係が非常に少ないです。親と先生しか大人を知らないです。学校に通わないと、それもないですから、親しかいない。親との関係が悪くなると、引きこもってしまうというこどもも多いわけです。

【議長】

第1次産業の時代は、その辺に「職業」がありましたが、今は、自分の親も含めて、どこで何をして稼いでいるのかわからない状態です。

専門学校などは良いですね。なりかけで、うまくいくかどうかかわからない。しかし、大学などと比べると、具体的な進路設計との関わりですよね、可視的でとても良いと思います。

こどもが多いときは、こども同士で遊ぶ時に、役割分担があり、ルールを決める係、リーダー格とか、後からチョロチョロついて行くとかありましたが、それも段々なくなってきました。兄弟も少ないので、その中で、自分の適性、役割のようなことを考える機会も減っています。半ば人工的に、学校でそういうところも、少子化で閉じた、余計に少人数のところでもそれをやろうとしても難しいので、そこをどう拡大するかというところですかね。

学校規模の話にも関わってきます。どうしても少子化は避けられない中で、これからますますこどもの数が減ってくる中で、どうなりますかね。単学級が増えている報告があります。その中で、6年とか9年を見通してというあり方が変わってきますかね。

すでにそのようなことは起こっていますよね。関わりが減った中で、こどもたちが大人との出会いとかはどのようになるのでしょうかね。

【委員】

コロナ前は、職業体験を中学校では、やっていました。そこで、目の前で働く大人と一緒に働いて、交流するというようなことですね。以前勤めていた学校で、同じようなことをやっていて、やんちゃな子が農家に働きに行きました。その後、農家のおじいちゃんと仲良くなり、「うち継げよ、おまえ」みたいになって、それをきっかけで更生はしないのですけれど、学校の先生からしょっちゅう怒られていた子が、農家のおじいちゃんに必要とされている体験をして、とても良かったと思います。

コロナ以降はそのようなことが途絶え、同時に、今は責任問題が厳しいです。外部の人との接点を作り、そこで何かトラブルがあったときに、責任は誰にとか、訴訟を起こされるという怖さがあり、時間的な確保ができないこともあり、なかなか進まないなと思います。しかし、いろいろな人との交流は大事だということは実感しています。学校の中でも、対話的な学習といいますか、いろんな人との会話は大切にしています。学年が変わる時に、クラス替えを行います。そのときには、人間関係にとっても気を遣い、この子とこの子を一緒にすると2人の成長になるとか、離れた方が成長するのではないか。新しい関係ができるかもしれないと気を遣ってやっています。

【委員】

クラス替えの話ではありませんが、学校に行きたくないなと小学生が思う大きな理由の一つとして、担任の先生との折り合いがうまくいかないということが明らかになっていると思います。その中で、学級担任とクラスのこどもの関わりが1年間続くということの、責任の重さはもちろんですが、その子の大切な1年間に、この人が毎日関わる。先ほどの話にもありましたが、こどもたちの、人との接点といいますと、家か学校かしかないのではないかという、狭い人間関係の中での、限られた大人との関わりが、担任1人という影響の大きさ、言い換えれば、恐ろしさを日々感じているところです。

一貫校によって、いろいろな先生、いろいろな大人と関わる環境ができるとすれば、それは、こどもたちにとってメリットがすごくあるだろうと思っています。意図的に、一貫校にしたからといって、こども同士の中でいろんな人と関わるかといって、そうではないと思うので、やはり意図的に、イベント的にも、継続的にも関わりを作っていく必要があるのかと思います。その中で、人との関わりが育っていくのかと思います。

【委員】

ご存じであれば、教えていただきたいと思います。先日、本屋でシュタイナー教育というのがあり、本当かと思ったのですが、シュタイナー教育では、1番下の学年から、7年生、8年生までクラス替えしないのだそうです。しかも、7年間担任も替わらない。その中で、もし、担任と折り合いが悪かったら、その子にとっては地獄だと思っていて、委員がおっしゃったように、自分の想像ですと、シュタイナー教育はドイツのものです。学校以外の自分の居場所がいっぱいあるのだろうと思います。居場所のうちの一つでしかないのだろうと思わないと、腑に落ちないです。どうしているのだろうと疑問があります。

【議長】

シュタイナー教育そのものは、遥か何十年前のシュタイナーさんが始めたもので、基本的には、私立の私教育に近いところの話です。欄外なのです。ドイツの主流でもないのです。特に、昭和の後期くらいに、シュタイナー教育の信奉者がとても多くて、一部の私立で実践していました。今は、ほとんどなくなったかなとは思いますが。基本的には、芸術活動、身体活動を軸に据えたカリキュラムづくりみたいなことです。日本ですと、学習指導要領の縛りがありますので、公教育の中には持ち込みにくいということがありました。こどもの発達を最優先させて、それを先生は支えるだけというニュアンスです。

もっと広く言うと新教育といひまして、今の初等教育は割と新教育っぽいんです。「教える」よりも「育む」という側に力点を置く教育思想のことで、100年くらい前から出てきています。日本で新教育がうまくいったのはどこかといひますと、成城、成蹊、玉川、師範学校付属、千葉も有名です。今の、お茶の水付属とかです。要するに、親が金持ちで、家庭教育に恵まれているという前提があります。わかりやすいのは、「窓ぎわのトットちゃん」がそうで、私は何度も読んでいます。あれ

は理想の教育ですが、私立の学校に戦前通えたというのは相当の金持ちで、黒柳さんのお父さんは（現在の）NHK 交響楽団のバイオリニストです。それくらいの方でないと、多分無理です。今は、むしろ公立小中学校は多様とって良いと思います。親の経済水準は多様になってきています。外国オリジンの方も多くいらして、そういう家庭での文化的バックアップが必ずしも見込めない中で、学校が支えていかなければならないということになってきていますかね。

話がずれましたが、シュタイナーというよりも、担任が替わらないということの問題ですね。逃げ場がなくなるということですかね。逆に、中学校では、担任の先生は朝の会に来るくらいで、日中は先生が入れ替わり立ち替わり来て、1人の生徒と接する時間が少ないので、小学校的な人間関係の中で支えるということは薄くなりますから、それぞれ案配が難しいですね。

【委員】

佐倉市で、地域部活動は、大学生が教えているとか、どこかの保護者の方が教えてくださっています。大学生とかに教えていただく経験は、中学生にとっては、今まで会ったことのない大人に会うという体験になっているようで、よく話を聞きます。学校の先生以上に、本音を話してくれるということが、最も身近に感じているようです。そこでは教師を目指している大学生が教えてくださっているので、余計、学校の先生に興味を持つようです。学校教育に近い方と子どもたちが、学校の先生ではない形で会う機会が、とてもくすぐられるようです。

子どもたちが子どもたちに教える体験って、リトルティーチャー的な感じで、早く解けた人が教えるという体験をさせてくださっているようです。先生だけが1人で背負わなければいけないという、ちょっとした思い込みのようなものは、子どもたちにも託して、自分はここまでやって良いというところを伝えてあげると、意外に子どもたちはそれを最大限活かそうとするというところがあります。

【議長】

「自己効力感」といいますが、平たい言葉で言えば、「手応え」といいますか、一つ一つ、自分のやっていることの意味が確かめられる。数学の教え合いのようなことは、東京都教育委員会ではずっとやっていました。良いことだと思います。できる子にとっての学びの深化にもなりますし、もっとやったら良いですね。

関係者なのであまり言えないのですが、教職志望の学生を現場に入れて、ガンガン活動させると、理解が深まって良いのと、その気になるというのが半分あり、残り半分はいやになるのです。

本質的な問題としては、無償の労働力を善意にかこつけてこき使っているということになります。「たまごプロジェクト」などもそうです。千葉は全般に、割と人使いが荒いです。県教育委員会に行っても、ニコニコしながら、これは良い施策ですよとおっしゃいますが、わかっていないところがありますね。ほぼ、無償です。

【委員】

うちの大学生が、系列やそれ以外の大学から来ていただき、チームアシスタントといいますが、一緒に入っていていただくことをやっています。18歳とか20歳とか、必ずしも、全員が教職を目指しているわけではありませんが、そういう大人を入れてみるといろいろなことが起き、おもしろいです。

【議長】

出会いを増やすこと自体はものすごく素晴らしいことです。

話題から離れても良いので、皆さんから、このタイミングで、この話題を盛り込みたいということがありましたらどうぞ。主に第5章関係ですかね。

【委員】

少し大きなテーマだったのですが、小中一貫が、問題解決の最初に来て良いのかというところがちょっと気になっています。

今の話ですと、まだまだ固まっていないところを先に出している。一つの方策であるのは間違いないと思いますが、最初なのかなと気になるところです。

【委員】

私もそう思います。課題が結構あるし、自分の娘が中学1年に上がるときに、中1ギャップと逆張りで、小学校6年の時にすごく嫌なクラスになり、病みそうになっていましたが、中学1年で救われたようです。いろいろなところから入ってきて、グチャグチャになり、リセットされ、とても救われたということもあります。一概に、良いとか、悪いとか言えないと思っています。しかし、きっとこれをやるのであろうとは思いますが、先ほど、居場所というワードも出ましたが、学校以外の居場所を平行して作るとか、先に子どもが頼れるような居場所を作ってからやるのが必要だと思います。これだけを進めてしまうと、怖いなという感じがします。課題の面をすくい取れることを一緒に考え、やりながらも、臨機応変に変えていくというような、柔軟性の中でやっていかなければ、難しいのではないかと感じています。

【議長】

今、お話があったようなコーディネート、企画推進は、運営協議会のことも含めて、学校の先生がやってしまうのであろうと思います。ただ、仕事が増えるだけで、しかも、こう言うは何ですが、視野が限られている学校の先生の裁量に任せると、期待している効果は望めないかもしれないですね。

プロジェクト1から5まであげており、なんとか、形として見せやすいところとそうでないところがあります。それで、このような順序にならざるを得ないのかとは思いますが、でもこれ、地域の話、学校運営協議会について、順位を繰り上げて良いかもしれないですね。

【委員】

プロジェクトのどれが最初で最後かということは、難しいところはあると思います。学校の立場でいうと、プロジェクト3の統合への取り組みというところで、これからこどもの数が減るのは間違いない、学級数も減ってくるとなると、限られた職員、今よりも半分になる職員で、同じ学校の施設の管理・維持ができるかといいますと、本当に厳しい状況があります。教員の数は、一つの学校に対して、一定数維持しないとやっていけないだろうというのが、正直、身につまされているところではあります。やはり、統合ということは、順位としては上の方にあって欲しいという希望は持っています。

【議長】

これは比べるものではないかもしれませんが、統合がらみでいうと、施設・設備を、この間から出ているように、更新の時期で、どこかを優先的に作らなければならないというのが、必然的に統合の話になってきますよね。それと、今の教員の問題等があり、予算を付けるのであれば、人の方ではないかと私は思っています。建物はどうにでもなるということではありませんが、そこを削ってでも、むしろ、加配する。市の予算裁定でも、建物を建てるより安いんです。だから、全体にしょぼくなるのがまずいわけですよ。学校のこどもの数が減るけれど、先生の数も減っちゃって、統合することにより、スケールメリットといいますか、教員が分担しなければならないところも狭くなるというのはありますか。

【委員】

統合を避けて、統合せずに市の努力で人員確保ができる、それが望めるのであれば、一番だとは思っています。ただ、そこには市ができること、県がしなければならないこと、国がすることというのは、どうしても限界があると思います。市でできることになってくると、人員をどこまで確保できるかという疑問はあります。

【議長】

今、ギリギリの人数じゃないですか。先ほど委員がおっしゃったのは、1年持つてくれるかなという心配をなさっている。言い方は難しいのですが、教員がその任務に堪えられないようなレベルの人が、残念ながらいるわけですよ。

【委員】

一定数いるというのは間違いないです。

【議長】

それでも、ギリギリでやっていかなければならないですよ。

【委員】

それでも、1年やっていかなければならない。浮いている職員は、誰一人いません。学級を持ってもらわないといけません。

教員の話ではありませんが、夏休みの前に、給食室の調理員がパタパタとやめるという話になりました。そのようなことになると、学校がある日は給食が出て当たり前という感覚で、保護者も、こどももいると思います。学校の中では、人がいないので明日は給食を出せませんよ、ということも考えないといけないという話題になりました。

先生がいないから、明日、授業ができないです、ということも、現実的に学校現場では日々向き合っている課題ではあります。だけど、できませんということはもちろん言えません。なんとか、凌いでいる状況です。そういう苦しさも、こどもたちの教育の質を上げるという視点で、この方向性を考えていますけども、学校はもうそこまでの体力はない。教育をどう維持するのかという、学校をどう維持するのかという視点でも、とりまとめを進めていただきたいです。これが、本当の現場の声です。

【議長】

こういう時代だからというよりも、こういう時代になっても、社会の非常に大事なインフラであって、これの底が抜けたらえらいことになるという認識ですよね。

中学校でも今の話と共通していると思いますが、教員が教科縛りで、配置が余計に難しいということはありませんか、人数のことなど。

【委員】

まさにそれです。ご存じのように、教員数は生徒数で決まります。今年いた、例えば数学の先生が抜けたら、数学の先生が来るとは限らないのです。いる先生の中で、全クラス、平均的な各教科の授業をしなければならないのです。それをどうやってもできないということがあります。それで、先ほどありました、教科外の先生がやらなければならない。そうすると、その先生は教科外もやるわけだから、1日に4、5時間ということもありうる。要は、空き時間がありません。数学と技術科を持ったとすると、二つの授業の準備をしなければならないし、テストを作らなければならない。それに、成績を付けなければならない。仕事が2倍になっているということなのです。ですから、非常に苦しい、苦しいとしか言い様がないところです。

生徒数が何人、特別支援学級の先生は特別支援の授業を何クラス持たなければならないということは、法律で決まっていますから、しょうがないのです。その法律は、東京の学校であろうが、地方の学校であろうが、すべてのこどもたちに同質の教育をするためにできたものです。しかし、今はその法律が現場を苦しめているという状況です。法律を変えて欲しいなというのが、本音です。

【議長】

元々、憲法26条で、教育の権利があります。どこに生まれて、どんな親の元に生まれても、どの地方に生まれても、同質の教育を受ける権利があるという前提で、今お話があったようになってきている。以前は、義務教育は国が半分出す。どこに生まれても違いがないように、一旦、国税で吸い上げて分配するということでし

た。しかし、小泉内閣の時から、どんどん削られています。財力のある自治体と、そうでないところの差が出てきています。さらには、市の規模、生産年齢人口の問題等にも関わってきて、恐らく、現在小中学校は市町村の担当ですけれど、どこも市町村は規模が大きくないですし、高齢化は進んでくるに決まっているので、今話した条件は、すべて悪化してくるだろうと思われまます。誰かのせいではないのですけれど。

【委員】

先生のお話で、建物よりも、教師にお金をかけた方が良いというところがありました。先生がお金をかけたら、増えるのでしょうか。少し解決されるのでしょうか。先生がいないのに、お金をかけても解決されるのかなと疑問です。例えば、給料が上がって、モチベーションが上がって、やりたい職業1位になるとか。そのようなことではなく、ここ数年の間で、お金を投資して、そこに人を回せるということの可能性はあるのでしょうか。

【議長】

現在、現場で必要な人数は、このくらいなのに、実際予算が低いところにしか組み込まれていないという問題が前提としてあります。その分をとということです。

現在、教員採用倍率の低下などを見ていると、私の目から見ても、ギリギリではありません。これ以上、倍率が下がると、しょうもない人が教員になっていって、委員の心配がまた増えるということになる。

千葉県・千葉市の教員採用で言いますと、先日、1次が終わり、2、3日前にその結果が出て、これから2次試験に進みます。数年前では、考えられないレベルの学生が受かっています。一番下がっているのは小学校です。首都圏では、小学校の倍率が、ほぼ正味1点何倍の世界になってきていて、よほどのことでなければ、落ちないというレベルでかなり厳しいです。元々、小学校は離職率が一番高いので、どうするかということですよ。

【委員】

教師は会社ではないので、学校の先生は年功序列がすごく強いですよ。20代の方は校長先生になれる可能性はないです。下剋上が許されない環境といえますか、それが、面白くないです。もし、娘が学校の先生になるのであれば、自分が校長先生になれる学校に行ったらどうかと。

【議長】

わりと、民間に比べれば、地位は上がらないかもしれないですが、やり手は発揮できます。特に、今は相当良いですよ。何よりも、絶対にクビになりません。そういう意味では、一旦入ってしまえば、やりたいことを発揮できる環境だろうと思います。

校長になるのが良いのかということは、今度先生に聞いていただくとして、私が見ていると思うのは、ブラック批判や働き方大変ですよといわれている中でも、ちゃ

んと受けてくれる人が結構いて、教員を目指していますと前向きに捉えてくださっている方がたくさんいるということは良いことです。そうでなければ、インフラが維持できません。私自身、長年やっていて思うのは、なぜやっているかというのと、楽しくてたまらない。儲からないかもしれないけれど、ヒューマンな関わりで、自分が教えたことがきっかけとなり、成長して、今までにない展開になってきたら、こんなに楽しいことはないわけです。

私は教員養成ですから、やっている中で、千葉県内には教え子とかその教え子のような人がいっぱいいます。そういうのを見ているだけで、楽しくてしょうがないです。やりがい搾取になってもいけないのだけれど、手応えのようなものは、この職業でないと得られないところがありますよね。そう言って、みんな自分を励ましているのではないですかね。

【委員】

先生が休んだら、授業ができないという状況は、農家さんでも同じような感じだと思います。どんなに体調が悪くても、オクラは1日2回採らないと大きくなるという感じだと思います。現場では、大変だけれど、自分がやりたくてやっているというのが一番だと思っています。私は自営でやっていますが、どんなに寝ない時間があったとしても、やっていて良かったと感動する体験が1回でもあれば、学校の先生を目指したくなると思います。今、学校の先生が少ないのだとしたら、その体験が少なかったのではないかと思うと、学校はめっちゃめっちゃ面白い場所であって欲しいと思います。

今、熱い思いを持って教師をしている方が大半だと思う中で、学校の先生を増やすために学校教育を変えるわけではありませんが、感動体験のようなものが所々に入っていないと、教室の中でずっとじっとはしてられないなと思います。私は不真面目な学生でしたが、大人になってから自分で何十万もかけ学びに行くというか、大人になってやっと学び始めました。これは、小学校の時に無料で受けられ、恵まれた環境にいるのに、それに気がつかないでいたというのは、感謝が足りない極みです。自分の今いる環境が当たり前と思っていることは、自分も含めてあります。それを考えさせられる体験が、教育のいろいろなところに散りばめられていたら、未来は変わるのかなと思います。

【議長】

そうあって欲しいですね。

【委員】

この間、先生たちにアンケートを取りましたね。その中で、時間があったら何をしたいのと聞いたら、教材研究とこどもと一緒にいる時間が欲しい、この二つです。現場の先生はやはり、やりがい、生きがいを持ってやっているのです。ごく一部で、それでストレスを感じたり、学校に出てこられなくなったりする先生がいるので、ブラックだと言われるわけです。多くは、やりがい、生きがいを持ってやっ

ているのです。さらに、勉強したいという先生も多いわけですから、それをもっと見せていかないといけないと思います。

【議長】

伝わって欲しいですね。

【議長】

1、2か月前くらいですか、小学校の先生がこどもの盗撮をやって、それを共有するなどという、とんでもない事案がありました。ああいうのがあると、世論が一発でそちらの方へ行ってしまうので、勘弁してほしいですね。一部であったとしても。

そろそろ時間が近づいていますが、お話ししたいことがあれば、お願いします。

【委員】

学校の規模のことですが、一定の規模がないと教員に校務の負担がたかさん行くことになると思います。単学級を解消するというのは、一つ、頭なのではないかと思います。そのために何をすれば良いのかを考えていくということではないかと思います。それが、統合の話になるわけです。単学級というの、こどもたちにとっても難しいいろいろな課題があるし、学校運営の立場からも難しいことが出てきていると思うので、これがスタートなのかなと思います。

【議長】

このところは、まだアレンジのしようがあると思いますので、もう少し考えましょう。次回は、もっと景気の良い話をしましょう。大丈夫だと思いますがね。

11月くらいになったら、国の施策も見えてくるのではないかと思います。期待するところです。

では、今日の議事はここまでにしたいと思います。事務局に戻します。

【事務局】

(次回会議の開催などについて伝達)

以上